

というところに工夫が必要らしい。分子構造にまで立ち入った話があちこちに出てくるが、理解しやすい。アマモも製紙の対象になっているし、マングローブ、エビ・カニ、浅草のりと浅草紙、苔（カワモズク）紙の話題もある。紙やパルプについてちょっとした話題を増やす本である。

第一頁の裾に「本文用紙はすべて海藻紙（ALGA CARTA）（輸入）を使用」と記してあり、それについては80頁の「工業化された海藻パルプ」に見られる。ベネチア湾の富栄養化に伴い異常繁殖した *Ulva rigida* の有効利用の話なのだが、イタリア語からの翻訳のせいか、「アオサは海草で、セルロースの含量が高い」となっていて、ちょっと信じ難い。海藻紙といっても一種の再生紙で、古紙パルプに海藻パルプを混ぜて作るのだから、分析すればセルロースの含量は高いだろう。

とにかくこの本はそういう由来の海藻紙で、ごく淡い黄色味を帯び、淡緑色の微細点をちりばめた、やや厚手の紙でできている。厚さは10枚で1.1 mm、本誌や文庫本の0.9 mmにくらべてゴワゴワした手ざわりである。印刷物としての出来ばえはどうということはないが、問題は製本である。無線綴じのくるみ製本だが、もらった本を開いたトタンに、最初と最後の数枚が外れてしまった。紙の博物館の受け付けにあった見本誌はもっとバラバラだった。どうやら接着剤との相性が悪いらしい。関心ある方は、本屋へ注文するよりは、紙の博物館（入場料300円）を見学してアンケートの見返りにもらう方がよさそうである。

（金井弘夫）

□福井希一，向井康比己，谷口研至 編著：クロモソーム植物染色体研究の方法。251pp. 2006. ¥6,930. 養賢堂. ISBN: 978-4-8425-0380-6.

本書は植物の染色体に関する研究方法について、89名の日本の研究者の詳細な研究方法を集めて、わかりやすく記載したものである。第1編は染色体標本の作製法で、押しつぶし法などの基本操作、分染法、生殖期染色体標本作製法、生物種ごとの特殊な染色体試料の作製方法が記載されている。第2編は分子細胞学的手法で、クローニング法、in situ ハイブリダイゼーション、複製解析法が記載される。第3編は染色体情報の解析と利用について記述されており、染色体情報表記法、フローサイトメトリーなどによる染色体情報解析、画像処理、電子顕微鏡および走査型プローブ顕微鏡について記載される。第4編は染色体操作で、交配による操作、染色体突然変異誘起法、培養による操作、染色体操作・加工法が記載されている。第5編は研究支援情報で、アラビドプシスなどの植物育成法、試葉の調製法、染色体試料、染色体・ゲノムウェブサイトが記載されている。

編者らは、このような植物の染色体研究には研究者が自分で工夫した技術、つまり「こつ」が大切であることを重視し、論文にあまり記載されない研究者独自の技術的貢献を記録し、残すことが重要だと考えてきた。本文中では非常に多くの研究方法が紹介されているが、これらの研究方法は単に手順を記載しているだけではなく、各研究者が重要と考えているポイント、つまり「こつ」が、注として添付されている。植物の染色体を研究する上で、また、染色体の研究だけでなく、全ての研究の「こつ」をつかむために非常に有益な一冊である。後書きにある「本書は我が国の植物染色体研究および関連分野の研究者89名が分担執筆し、作り上げた後代への贈り物である」の言葉が印象深い。（近藤健児）